



茨城県地域臨床 教育センターだより

2025
Vol.53

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121 令和7年12月1日発行(第53号)

茨城県立中央病院遺伝子診療部 10年の歩み



病院教授

齋藤 誠

専門領域 ■ 小児科
■ 新生児
■ 周産期遺伝

9月1日に筑波大学附属病院茨城県地域臨床教育センター小児科病院教授に就任しました齋藤誠と申します。といっても、私自身は2015年9月に茨城県地域臨床教育センターに准教授として赴任しており、今回赴任後10年で茨城県地域臨床教育センターの任期が満了したため、再度筑波大学附属病院茨城県地域臨床教育センターに病院教授として勤務することになりました。今回はそのご挨拶を兼ねて、この10年間に茨城県立中央病院で私が行ってきた遺伝医療についてお話しさせていただきたいと思います。

茨城県立中央病院の遺伝医療は2016年1月に遺伝診療部(現遺伝子診療部)が設立されて始まりました。最初は臨床遺伝専門医の私と、非常勤の認定遺伝カウンセラーの2名で開始しましたが、その後認定遺伝カウンセラーは常勤となり、臨床遺伝専門医も1名加わり、計3人で遺伝医療を行っています。

当院での遺伝医療が開始後、2018年3月に乳癌・卵巣癌患者様を対象にBRACAnalysis診断システムが保険適応になりました。これは日本で初めて生殖細胞系の遺伝子検査の結果で薬物の投与が行えるようになるシステムで、遺伝性乳癌卵巣癌の原因遺伝子であるBRCA1・BRCA2遺伝子を検査し、陽性なら新しい抗がん剤であるPARP阻害剤を使用できるシステムです。患者様は新しい抗がん剤を使用できるようになりますが、同時に常染色体顕性遺伝病である遺伝性乳癌卵巣癌と診断されますので、遺伝性乳癌卵巣癌の他の癌種に罹患しやすいということが判明しますし、1/2の可能性で親子・兄弟が同じ体質をもつということになります。そこでBRACAnalysis診断シ

テムは遺伝カウンセリングを行える施設もしくは、その施設と連携している施設で行えませんが、当院ではBRACAnalysis診断システムを行いたい施設と連携し、当院で遺伝性乳癌卵巣癌と診断された患者様のみならず、それら連携した施設で遺伝性乳癌卵巣癌と診断された患者様の遺伝カウンセリングも行っております。

また2018年10月にはがんゲノム医療連携病院に認定され、2020年1月からがん遺伝子パネル検査を開始いたしました。茨城県内では筑波大学附属病院、土浦協同病院、当院の三施設のみががんゲノム医療連携病院と認定されており、県央県北の患者様を中心にがん遺伝子パネル検査を行っています。がん遺伝子パネル検査は、標準治療がないもしくは終了した患者様のがん細胞の遺伝子の変化を調べることにより、変化に応じた薬物を見つける検査です。現在検査を行うことにより、半分程度の患者様に遺伝子の変化に応じた薬物がみつかっておりますが、実際に薬物を投与することができた患者様は10~15%ほどです。しかし、徐々に投与できる薬剤は増えてきていますし、現在茨城県立中央病院では年間100件程度の検査を行っています。また開始当初は固形癌のみが対象でしたが、2025年には造血器腫瘍にも適応が拡大し今後さらなる件数の増加が見込まれております。

他には当院は2018年11月に人類遺伝学会の臨床遺伝専門医の研修施設に認定されてました。この施設認定は茨城県内では、筑波大学附属病院と当院しか認定されておらず、当院だけでなく県央・県北の施設からも臨床遺伝専門医になることを希望する医師をうけいれており、2025年には2名の研修医(当院の医師1名、県央の病院の医師1名)が臨床遺伝専門医に認定されております。

このように当院は茨城県の県央・県北地区において遺伝医療の中心的な施設として、自施設のみならず近隣施設の患者様にも遺伝医療を提供するとともに、県央・県北の遺伝医療のさらなる発展のため人材育成も行わせていただいております。

第25回筑波大学付属病院 茨城県地域臨床教育センター 講演会の報告



教授
柳川 徹

専門領域 ■ 歯科口腔外科

2025年10月10日、Web講演会形式にて、埼玉医科大学国際医療センター 頭頸部腫瘍科・耳鼻咽喉科の山崎知子教授をお招きし、「頭頸部がんにおける薬物治療・支持療法」についてご講演いただきました。

山崎教授は、医師と歯科医師の資格を持ち、頭頸部がん、甲状腺がん、支持療法、歯科を専門とされています。国立がん研究センターや宮城県立がんセンターでの豊富な臨床経験を活かし、現在は埼玉医科大学国際医療センターで頭頸部腫瘍科の教授として診療・研究・教育に従事されています。特に、手術・放射線・薬物療法と並行し、副作用軽減や口腔ケアを含む支持療法にも力を入れておられます。

ご講演では、まず頭頸部がんの疫学やリスク因子、HPV感染の有無による特徴の違い、部位別・病期別の治療方針について解説されました。局所進行例ではシスプラチン併用化学放射線療法が標準治療であり、急性毒性・晩期毒性の管理が極めて重要であること、また再発・転移例では免疫チェックポイント阻害薬（Pembrolizumab、Nivolumab等）の有用性と副作用管理の重要性が強調されました。

特に、化学放射線療法に伴う口腔内副作用や栄養管理、疼痛管理、感染管理などの支持療法の実践例が紹介され、治療完遂のためには多職種連携と患者・家族への教育が不可欠であることが示されました。また、がん患者の就労支援や経済的問題にも触れ、社会的サポート体制の充実が求められる現状についても言及されました。

さらに、頭頸部がんの治療は単に腫瘍の制御だけでなく、患者さんの生活の質（QOL）をいかに維持・向上させるかが重要であることが強調されました。治療に伴う副作用としては、口腔粘膜炎や味覚障害、嚥下障害、口腔乾燥、皮膚炎、聴力障害など多岐にわたり、これらに対するきめ細やかな支持療法の実践が不可欠です。山崎教授は、歯科医師としての知見も活かし、放射線治療前の口腔ケアや治療中・治療後の継続的な歯科的サポートの重要性についても具体的な事例を交えて説明されました。

また、近年の治療の進歩として、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬の導入による治療成績の向上が挙げられましたが、それに伴い新たな副作用や管理上の課題も生じていることが紹介されました。特に免疫関連有害事象（irAE）への対応や、長期生存例における晩期障害の管理、さらには治療後の社会復帰や就労支援の必要性についても言及され、医療者だけでなく社会全体で患者さんを支える体制づくりの重要性が強調されました。

山崎教授は、単にがんを治すだけでなく、患者さんが治療を最後まで乗り切り、治療後の生活の質（QOL）を維持できるように、きめ細やかなサポート体制の構築・実践に尽力されています。今回のWeb講演会は、頭頸部がん治療の最新知見とともに、患者中心の医療の在り方を考える貴重な機会となりました。

山崎知子先生からのメッセージ



埼玉医科大学国際医療センター 頭頸部腫瘍科・耳鼻咽喉科では、見学を随時歓迎しております。頭頸部がん治療や薬物療法に関心のある方は、ぜひお気軽にお問い合わせください。

また、私が現在理事長を務めております日本がん口腔支持療法学会では、第11回学術大会を**2025年12月5日・6日の両日、がんセンター中央病院研究所にて開催予定**です。がん患者さんの口腔管理の質向上について、幅広く議論できる実りある学術集会にしたいと考えております。皆さまのお越しを心よりお待ちしております。



筑波大学
University of Tsukuba

筑波大学附属病院 茨城県地域臨床教育センター

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121

ホームページ <https://www.hosp.tsukuba.ac.jp/chiiki/cyubyo/>



茨城県